九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『去来抄』と異本『落柿舎遺稿』 : 俳書管見(一)

大内, 初夫
鹿児島大学教授

https://doi.org/10.15017/10511

出版情報：文獻探究. 9, pp.5-9, 1981-12-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『去来抄』と異本『落柿舎遺稿』

――俳書管見(一)――

大内初夫

去来没後七十年を経て、安永四年に尾張の暁台によって刊行された『去来抄』は、大東急記念文庫本が去来自筆草稿本であるとほぼ確認された今日においても、なおその伝来について不明な点が多いように思われる。本稿では架蔵の『去来抄』を紹介し、異本『落柿舎遺稿』との関係についてふれ、宇鹿系写本の伝来について少しばかり言及してみようと思う。

さて、『去来抄』の一写本に『落柿舎遺稿』と題するものがあり、早く嘗奇楼叢書に収められ活字化されて世に知られている。但し、この叢書の所拠本が誰の蔵書で、どういう体裁のものか明らかでない。同じ題名を持つ写本で所在の確認出来るものとしては、大阪女子大学山崎文庫本がある。そのほか若干題名を異にするが、岩波『国書総目録』によると、『去来遺稿』と題した本が富山県立図書館志田文庫に蔵され(1)、また『落柿舎去来遺稿』と題した本が早稲田大学に所蔵されている。つまり「遺稿」を題名に用いた『去来抄』の異本には、

(1) 去来遺稿
(2) 落柿舎遺稿
(3) 落柿舎去来遺稿

の三種があるわけであるが、これらは大体同系の写本と見て間違いないように思われる。というのは、普通『去来抄』と題する本が「先師評」「同門評」「故実」「修行」(板本は「故実」を欠く)の順序に収められているのに対し、この『遺稿』系の写本は、例えば、早大本が「故実篇」「先師評」「同門評」「修行教」、山崎文庫本が「故実」「修行」「師説」「衆評」の順になっており、『大東急記念文庫本去来抄解説』によると、岩田九郎氏蔵『去来遺稿』も「故実」「修行」「師評」(後半以下欠如)となっているよしであり、いずれも「故実」編が巻初に置かれているという事実が特徴的に認められるからである。

ところで、去来自身によって題されたはずの『去来抄』(2)に、こうした別名がどうして生じたのであろうか。『去来抄』が去来自身の命名になるとした場合、こうした別名の写本の存在することは納得のゆかないこととして、『去来抄』の成立そのものに疑念を抱く向きもあるようである。従って『落柿舎遺稿』という題名の因るところ、およびこの写本の性格を明らかにすることは、右の疑念を払拭する上でも大切なことと考えられるが、その解決の手がかりとなる資料が架蔵本の識語の中に見出

だせた。

架蔵の写本『去来抄』は、実は十年ほど前に東京神田の古書店の店頭にて入手したものである。書誌的なことを若干記せば、表紙茶色、半紙本一冊、袋綴じ。初めに遊紙が一枚あり、墨付き六十九丁。題簽は左肩に貼付され「去来抄　全」とある。遊紙の内側に「松五」と旧蔵者名を記すが、松五のことは一切不明である。この写本で特に目を惹いたのが、奥に見られる次のごとき書写者の識語である（便宜句読点を付す）。

(一)此書ハ、去来先生之舎弟魯町向井元成也方に有りしを百花先生写し置たまふを、後百花紗鹿子より写し伝へ侍る也。尤みたりに他見をゆるさず、其故ありとなむ。

于時宝暦甲戌二月　　蛙夕坊

(二)本書の題号去来抄と有けれと、ある物識の曰、抄と八如此の物を云さるよし、兼而聞及しまゝ、私に改めて落柿舎遺稿と外題し侍りしに、或時此表帋、胤のために破られしか本書に八少しの疵もなし。おもふに此題銘の霊鑑に叶八さるにやと、本のことくにして、猶艸稿の写と四字を添る事しかり。

于時明和二乙酉正月十六日　　蛙夕坊

書写者蛙夕坊は肥前長崎の人である。詳しいことは知らないが、長崎県立図書館渡辺文庫所蔵の『俳諧発句十六篇』奥書に

「宝永六丑年百華井宇鹿撰

門人蛙夕坊其麓子より伝立写書する者也

天明六午年写之　　領江亭都春」

とあるのに気付いた。これにより俳号を其麓といったことが分かる。また、宇鹿の門人のようにとれるが、宇鹿の子紗鹿にも師事している。宇鹿は西田氏、別号百花井。去来や野坡に師事した長崎蕉門の重鎮で、元禄十三年に『艸の道』を紗柳と共編しており、『俳諧発句十六篇』『俳諧付句十四体』の著もある(3)。享保十七年九月晦日没。紗鹿はその一子、父の後を継いで後百花井を号し、去来三世を称した。宝暦八年三月一日没。蛙夕坊其麓は宇鹿に師事したとしても、その年代は短く、主として紗鹿の教えを受けたようである。『後百花井紗鹿先師追悼集』(4)には、

三月朔日嗚呼いかなる日そや。
桃花は上巳の枝にさひしく、杜
鵑は暮春の雲にさけふ。人世の
無常誰か是をしらさらん。しら
はなとかく驚くにや。さハよし。
けふハ是夢か、是うつゝ歟。

手をくむや花咲朝もちる暮も　　其麓

の句が入集している。

(一)の宝暦甲戌（四年）の識語によると、去来の実弟長崎の魯町（向井元成）のもとに伝えられていた『去来抄』を、魯町の俳友百花井宇鹿がまず転写し、それを更に後百花井紗鹿が写し伝えたものと

いう。但し架蔵写本は、紗鹿の筆蹟ではなく、識語に云う蛙夕坊其麓の筆蹟（識語・本文とも同一の筆）と見られ、紗鹿本を蛙夕坊が筆写したものであろう。なお、この魯町のもとにあった『去来抄』とは、(二)の識語の「艸稿の云々」を参考にすれば、去来草稿本であったと見られ、つまり現存の大東急記念文庫本と同一のものと断定してよかろうと思われる。即ち同文庫本には、旧蔵者綱坊灰霸が崎陽で記した「或時知府の館にありける若杉の何がしと風雅を語るに、柿（ママ）落舎の草稿其家に残せり、云々」の識語がある。「知府の館」というのは、ここでは多分長崎奉行所と解してよく、灰霸がこれを入手した頃には、既に魯町の家から奉行所の属僚若杉某の手に移っていたことが知られるのである。いずれにしても去来の急逝によって草稿のまま残された『去来抄』自筆本は、長崎の魯町のもとに所蔵され、それを去来門弟で、かつ『去来抄』の質問者の一人として登場する宇鹿が借用して転写し、沙鹿・蛙夕坊其麓と転写され伝来したのであった。そうした長崎における去来世代の宇鹿系写本として、宇鹿・紗鹿の転写本が知られない今日、この蛙夕坊写本は注目に価するものと考えられる。右に述べた『去来抄』の伝来・転写の関係を図示すれば次のごとくなろう。

『去来抄』草稿本（去来）----→（魯町）----→（若杉某）----→（灰霸）----→（大東急記念文庫）

宇鹿本（宇鹿）----→（不明）

紗鹿本（紗鹿）----→（不明）

蛙夕坊本（蛙夕坊）----→『落柿舎遺稿』（早稲田大学その他）

次に、『去来抄』の題号中の「抄」の用法が、内容の大半を芭蕉や同門の人々の句評とする現在の同書の書名として、必ずしも適切でないとする見解があるようであるが、古人もまた同様な見解を抱いたようであり、(二)の明和二年の識語によると、蛙夕坊は或人から「抄と八如此の物を云ざるよし」をかねて聞いていたので、それで私に外題を『落柿舎遺稿』と改めたということが知られる。然りとすれば、『去来抄』の別名として初めにあげた『落柿舎遺稿』の題名は、実は蛙夕坊の一時の恣意的な計らいに出たものであったのである。勿論、表紙のみ虫害にあって本文はいささかも疵がなかったので、この私に付した外題が著者去来の「霊鑑」にかなわないのであろうと反省し、またもとの題に改めて「艸稿の写」の四字を添えたというのである。因みに架蔵本の題簽に「艸稿の写」の四字が見えないことから考えると、蛙夕坊による題簽が失われ、現存のものは後人によるものと見るべきであろうか。それはともかく、蛙夕坊が『去来抄』の題名を『落柿舎遺稿』としていた時期は、(二)の識語によればそう長い間ではなかったろう。最大限に見て(二)の識語が書かれた宝暦四年と、(二)の識語が書かれた明和二年の間としても十一年である。しかしこの期間にも、蛙夕坊の手もとにあった『落柿舎

遺稿』が転写される可能性は十分にあり得たのであって、ここに『遺稿』系諸本の題名は出ているとしてよかろう。

(二)の識語にいうところを右のごとくだいたい信頼してよいと思うのは、蛙夕坊写本の内容も「故実」「修行」「先師評」「同門評」の順序に並べられていて、既に見たごとき『遺稿』系写本と同じ順序であることによる。そして恐らくは、この写本の系統のもとである宇鹿本自体も、こうした順序に収められていたのではないかと推測される。現存の大東急記念文庫本を参考にして言えば、去来自筆草稿本は、多分「先師評」と「同門評」、「故実」と「修行」が、それぞれ一冊として綴じられていたものと思われる。宇鹿本はそれを「故実」から写したものと思われるが、それは、「故実」の草稿本が「先師評」の一冊よりも墨消しや書き入れといったものが少なく、はるかに写しやすかったためではなかろうか。

なお、この蛙夕坊写本の(一)(二)の識語は、その文意から宝暦四年に書写して記したもの(一)に、外題に関する識語(二)を更に明和二年に書き加えたようにとれる。しかし、二つの識語の日付けには十一年の隔たりがありながら、墨色や筆蹟の具合いが全く同一で、相違が認められない。ゆえに架蔵本は、蛙夕坊が宝暦四年識語の手もとの本を明和二年に再写したものであろうと考えられる。『去来抄』の諸伝本の調査は、先学によって種々行なわれているものの、明確な書写年時を有する写本は意外に少ない。例えば尾形仂氏の調査[5]によると、早大本(『落柿舎去来遺稿』)が「文政七甲申歳」、若海旧蔵天理図書館蔵本(『芭蕉翁評釈去来抄』)が「宝暦九年」書写本よりの転写本(転写の年時不明)で、その他は書写年時未詳である。従って、安永四年刊本の出板以前に遡り得る、書写年時の明確な『去来抄』の写本は、大東急記念文庫の草稿本を別として、これまで知られていなかったわけであり、そうした点からも明和二年識語を持つ宇鹿系蛙夕坊本は注目してよいものと言えよう。

終りに一言すれば、去来自筆草稿の知られる「先師評」「同門評」は別にして、そうしたものの知られない「故実」「修行」の両編においては、やはり校本の作成が当面重要な仕事であろうと思われる。これまで右の二編の底本として、活字化の場合によく国会図書館本が用いられている[6]が、どうも誤字・脱字が多く必ずしも善本とはなし難いようである。参考までに次に国会本の問題ある箇所を、蛙夕坊本を並記して掲出しておく(頭書の頁数は『校本芭蕉全集』第七巻のそれである)。

P.113
(国) 長頭丸以後の俳諧を以て元来とし給ハず……仍て連俳の式をかり用ひらる
(蛙) 長頭丸已後の誹諧を以て元としたまハす……仍而連哥の式をかり用ひらる

P.123
(国) 先師曰世上俳諧の文章を見るに或漢文を倭名に和らけ或ハ和歌の文章に漢章を入詞あしく賤くいひなし
(蛙) 先師曰世上俳諧の文章を見るに或ハ漢文を仮名にやハらけ或ハ和哥の文章に漢音を入或ハ詞あらく事いやしく云なし

p.125　　p.126

(圀) 去来日外題の寸法あり従ハ表紙の三分ケ一を取……
(蛙) 去来日外題の寸法有り縦ハ表紙の三分か二を取り……

(圀) 去来日先師の俳諧書の名は……葛の松原笈の小文庫皆其趣也……魯町曰浪化集と俳書の名は詩和史文を分つへからす
(蛙) 去来日先師曰俳諧書の名は……葛の松原笈の小文集皆其趣なり……魯町曰浪化集と誹書の名ハ詩哥史文を分ツへからす

蛙夕坊本の全文の翻刻はいずれ折を見て行ないたいと考えている。

（以上）

【註】

1 尾形仂氏『大東急記念文庫本『去来抄』解説』に岩田九郎氏蔵本として『去来遺稿』が見える。

2 杉浦正一郎先生「去来抄の確実性と其執筆年代」（『文学』昭和14年11月号。『芭蕉研究』に再録）。

3 古典文庫『蕉門俳論集 続』（大内編）解説を参照されたい。

4 『太白』（昭和44年4月号）に中西啓氏による翻刻がある。原本（写本）は長崎県立図書館所蔵。

5 『大東急記念文庫本『去来抄』解説』。

6 日本古典文学大系『連歌論集俳論集』（昭和36年）・『校本芭蕉全集第七巻 俳論篇』（昭和41年）など。筆者も古典俳文学大系『蕉門俳論俳文集』（昭和45年）に使用した。

【付記】
早稲田大学図書館並びに大阪女子大学所蔵本については雲英末雄氏・桜井武次郎氏に御迷惑をおかけした。ここに記して謝意を表する次第である。
（昭56・11・28）

——鹿児島大学教授——